

巻頭言

「ヒマラヤ学誌」第6号をお届けする。本号は、京都大学ヒマラヤ医学学術研究計画（Kyoto University Medical Research Expedition to Himalaya）の一連の研究を報告したものである。特に、1994年度におこなわれた第11次隊（中国雲南省北部）と第12次隊（モンゴル）での調査については、それぞれをまとめて特集とした。

本号に掲載された研究報告は、すべて文部省科学研究費・海外学術調査の助成を受けておこなわれたものである。しかも今年度は、堀了平先生（近畿大学薬学総合研究所教授・京都大学名誉教授）を代表としておこなってきた3カ年の継続研究の最終年度にあたる。その区切りの時期を迎えるに当たり、来た道を振り返りつつ、行く道に思いを馳せて、巻頭の辞としたい。

1987年秋、かつて京大山岳部で登山を契機として結ばれた同志が京都に集い、今日に続く「ヒマラヤ地域を研究の対象とした学の成立」を構想した。集まった同志のなかで、プロジェクトの核になったのは、4人の医学研究者である。かれらが時を同じくして臨床の場から大学に戻った。瀬戸嗣郎（島根医科大学）、松林公蔵（高知医科大学）、平田和男（京都大学）、出水明（大阪大学）である。山岳部出身の同じ世代に属する4人もの医師が、偶然にも同じ時期に大学に籍をおいていた。ヒマラヤを巨大な慢性の低酸素実験室と見立て、医学を中心としてパラ・メディカルも含めた研究を展開し、そうした学術研究を前面に掲げた新しいスタイルの登山を構想した。そうした若者の夢に理解を示してくださったのが、戸部隆吉先生（当時京都大学医学部教授、現在名誉教授）である。同志が結成した京都大学ヒマラヤ研究会の代表として、文部省や厚生省からの研究助成の研究代表者として、また最初の目標となるシシャパンマ登山計画の総隊長として、われわれの活動をその広い翼の下に置いてくださった。戸部隆吉先生のご退官後は、京大山岳部の先輩でもある堀了平先生がその役をお引き受けくださり、今日に到っている。幸いにも、1988年以来8年間もの長きにわたり、継続して科学研究費を得ることができた。こうした経済的な支援が無ければ、第3の極地ヒマラヤを対象としたフィールド調査を実施することは不可能だっただろう。何よりもまず、両先生のこれまでのご尽力に対して深く感謝したい。

文部省から研究助成を受けた海外学術調査について、各年度の研究代表者と研究課題番号と助成金額を列挙する。1988年度：戸部隆吉、#63041162、850万円。1989年度：戸部隆吉、#01041060、1100万円。1990-92年度の3年計画：戸部隆吉、#02041047、合計3200万円。1993-95年度の3年計画：堀了平、#05041112、合計1800万円。この一連の研究を発足させた当初の5年間は、京都大学と千葉大学の合同プロジェクトとして実施された。千葉大学の側は、とくに呼吸生理学に焦点を絞った研究で、チベットにおけるフィールド医学研究を共同して展開した。この共同研究の歩調を合わせてくださった千葉大学の本田良行・栗山喬之・福田康一郎・増山茂らの諸先生方にお世話になった。またフィールドでの医学研究の先達として、家森幸男先生（現在京都大学教授）からも貴重なご助言を賜った。また文部省だけでなく、厚生省からもシルバーサイエンス計画の研究助成をいただいた。以上、記して感謝したい。

この8年間にわたる支援のもとに展開された研究の成果が、とりもなおさずヒマラヤ学誌1号から6号までに報告されている論文である。プロジェクト全体の足跡は、西はパミール高原から東は雲南に到

るグレート・ヒマラヤの全域を覆うだけでなく、モンゴル高原から、さらに遠く南米アンデス高地にまで届いている。1989年度の第1次隊（カラコルムのムスターグ・アタ峰、7人）、第2次隊（ネパール・クンプ、8人）。1990年度の第3次隊（チベットのシシャパンマ峰、32人）。1991年度の第4次隊（ネパール・クンプ、11人）、第5次隊（フンザ・カラコルム、8人）。1992年度の第6次隊（フンザ・カラコルム、12人）、第7次隊（アンデス、19人）、第8次隊（ネパール・クンプ、3人）。1993年度の第9次隊（パミール高原、10人）。1994年度の第10次隊（中国雲南省南部、4人）、第11次隊（中国雲南省北部、10人）、第12次隊（モンゴル、3人）。1995年度の第13次隊（チベットからネパール、13人）、第14次隊（ネパール・タムール、1人）、第15次隊（ブータン、5人）、第16次隊（グアム、5人）、第17次隊（モンゴル、2人）、第18次隊（ミャンマー、1人）、第19次隊（インド、1人）。日本人だけに限った数だけでも、第1次から第19次までの参加人数を合計すると、のべ155人にのぼる。この8年間にわたるフィールドでの全調査日程を概算すると、約5000人日に達する。

一連の研究プロジェクトにおいて、実際にフィールド・ワークをおこなった者は、開始の順に以下の通りである。河合明宣、松沢哲郎、松林公蔵、古川彰、瀬戸嗣郎、月原敏博、門田勤、出水明、富永浩三、中山茂樹、白沢あずみ、藤田耕史、遠藤克昭、菅典道、永田龍、戸部隆吉、堀了平、林一彦、中島道郎、斉藤惇生、松林清明、米本昌平、上田博和、平田和男、久保茂、足立みなみ、永田龍、陣内陽介、杉江知治、高井正成、榊原雅晴、坂井克行、藪野義弘、田沢英二、井上有史、井上真、上野吉一、神谷一郎、藤沢道子、曾根哲寛、野田智子、内田一茂、宮本寛、江本博文、奥宮清人、日上耕司、宮田速雄、宮本千草、利岡ひとみ、松本一宏、和田泰三、辻有子、石根昌幸、木村茂昭、牛田美幸、福崎賢治、細川公子、中平真理子、濱田和子、仲野令恵、依光隆明、神谷利明、河原田美樹、神谷直子、小林邦江、今井一郎、村上満希子、辻本雅史、成瀬哲生、池上哲史、中谷真憲、松野昌展、川崎公男、和田知子、佐々木一恵、森田拓、日下京子、来山浩之、遠山仁、坂東千昌、小川洋平、加藤賢郎、吉田数真、長尾和浩、西内貴文、佐藤恭子、藤井智代子、細田英樹、竹内菜津子、松村博文。以上90名である。

この8年間の軌跡を概観すると、大まかに言って、3つのことが明瞭に見えてくる。第1に、高みをめざした当初の試みが、しだいに面として広く展開している。ヒマラヤ全域を対象としたフィールド・ワークが始まったと言えるだろう。第2に、当初の核であった医学研究は今なお研究の重要な柱であるが、人類学、生態学、社会学、教育学といった他分野もまきこんだフィールド・ワークに変貌しつつある。第3に、小さな同志的結合から始まったものが、大きな人の輪のひろがりとなった。「継続は力なり」という。この8年を礎として、その波紋の広がりがさらに遠くまで達するように努力したい。

なお本号も、社団法人・京都大学学士山岳会（現会長、高村泰雄京都大学教授）の第4事業「山岳登山に関する図書および機関誌の発行」から出版の助成を受けた。上記の研究プロジェクトを推進するメンバーの多くはその会員でもあるが、この間絶えることなく賜った同会からのご支援に対して厚く御礼申し上げます。

「ヒマラヤ学誌」編集委員一同